



Title	在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因に関する考察：茨木 Masjid と地域社会の交流の事例から
Author(s)	Elhadedy, Ibrahim Mohamed Ibrahim Abdelrahim
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81986
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (Elhadedy Abdelrahim Ibrahim)

論文題名

在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因に関する考察
—茨木マスジドと地域社会の交流の事例から—

論文内容の要旨

本研究の目的は、大阪茨木マスジド（イスラムにおける礼拝所）と地域社会の関わりを記述し分析することで、在日ムスリムと日本社会の共生を可能にすると考えられる要因を明らかにすることである。序論では、現代社会における課題、とりわけグローバル化の進行と個人化を論じ、そうした情勢は、言語・宗教・民族などが異なる人々が、同じ場所に住むことに繋がることを述べた。次に、「世界におけるイスラムとムスリム」の節では、ムスリムやイスラムに関する基本的な背景を解説した上で、ヨーロッパにおける多文化共生政策を説明し、とりわけフランスの失敗事例から、新しい共生のあり方が必要であることを確認した。そして、「日本におけるイスラムとムスリム」の節では、イスラムと日本の歴史及び先行研究を整理し、在日ムスリムの現代における課題を確認した。それを踏まえたうえで、「在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因とは何か」という、本論文における最大のリサーチ・クエスチョンを提示した。その問いに回答するため、筆者は、半構造化インタビューと参与観察を用いて、大阪茨木マスジドを調査した。大阪茨木マスジドは、地域社会との関係を大切にしているため、フィールドワークの対象として適切であると考えられる。本マスジドを調査することにより、在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因の考察が可能になると筆者は考える。

第1章では、近年の日本におけるマスジドの増加理由を探り、マスジドが果たしている多様な機能にその理由を求めた。その機能の一つとしては、「在日ムスリムと日本社会の橋渡し」という機能があげられる。しかし、その機能が適切に役割を果たすためには、マスジド内部におけるムスリム同士の関係が重視される。なぜなら、ムスリム同士の良好な関係性は日本社会との関係の基盤となるからである。そのために、第2章ではマスジド内部におけるムスリム同士の関係に注目し、そこでムスリム同士の共生が成り立っていることを明らかにした。その要因の一つとしては、「日本においてはムスリムがマイノリティである」という特殊な状況があげられる。そうした特殊な状況により、礼拝する場所の確保、ハラール食品の入手、日本語でのコミュニケーションの必要性という困難を背景として、多様なムスリム同士の協力が必要となった。そのために、ムスリム同士は国籍・言語・民族・肌の色などの多様なバックグラウンドを乗り越え、「信仰縁」に基づき、共生関係を形成し、それを維持しようとした。在日ムスリムは、ムスリム間の共生が一番重要な課題であるとして、その問題を認知し、ムスリム間の共生を図るためのシステムを形成したのである。このシステムの重要なポイントは、大阪茨木マスジドに通うムスリム全員が、自身の意見を封殺されることなく、誰もがマスジドの意思決定に参加できるようにしたという点にある。また、このシステムは固定的なものではなく、状況とともに変化するように柔軟な制度設計がなされている。

次に、在日ムスリムと日本社会の関係に注目した。第3章では、大阪茨木マスジドに通う在日ムスリムも地域社会の日本人も多忙な毎日を送りながら、平常時における双方の関係・交流の事例を記述し論じたことに意義があると考えられる。そこでは、日本の地域社会も大阪茨木マスジドのムスリムも、それぞれが多忙でありながらも、意図的にその交流を双方が計画することによって、交流が可能となることがわかった。また地域社会（日本の主流社会）がイスラム・ムスリム（マイノリティ）に接触することは、メディアによる誤解を解く可能性があることを明らかにした。したがって、ここからは交流を継続する重要性がうかがえる。そして、第4章では災害時における大阪茨木マスジドに通う在日ムスリムが西日本豪雨による被災地・被災者への支援として募金活動を行った事例を記述し論

じた。そこでは、イスラムにおける「困っている人を助けなさい」という教義と「近所（の人々）を大切にみなさい」という教義が重複したことに加え、大阪府北部地震によって開設された避難所において、ムスリムが食べられるハラール食品の提供が行われたという事実があいまって、その災害支援に対する責任感を在日ムスリムが感じたため、形ある支援活動にまでその活動を発展させたのではないかと考えられる。さらに本章では、唯一神アッラーの存在によって「支援する側と支援される側の対等な関係」が形成されることを明らかにした。なぜなら、こうした視点からは、支援する側も支援される側も唯一神アッラーの恵みを受けていると考えられるからである。このような対等な関係は、在日ムスリムと日本社会の共生の可能性を生み出していると言えよう。

そして、イスラム・在日ムスリムと日本社会を結びつける日本人ムスリムの役割と日本語について、第5章と第6章で実践の事例を記述し論じた。第5章では、日本人ムスリムは高度な日本語と日本社会への深い理解を通して、日本社会とムスリムを結びつける「架け橋」の役割を持つと論じてきた。例えばADさんは、日本人とムスリムが、一緒にハラール食を食べたり直接的にムスリムに会ったり交流ができるように努力している。さらにADさんは、その交流が一回だけで終わらないように、継続してその交流イベントを計画した。そうした交流が継続されていることは、共生への道を歩んでいることを意味していると思われる。したがって、日本人ムスリムの存在は、日本社会とムスリムの共生を支える重要な柱であるといえる。また、大阪茨木モスクは日本にあるモスクであるため、そこに通うムスリムたちが日常生活を送る上で、日本語が不可欠である。第6章では、大阪茨木モスクに通う在日ムスリムたちが直面する、日本語を必要としている多様な場面を記述し分析した。その結果、モスクの運営面やムスリム・コミュニティにおけるメンバー間の関係構築において、日本語能力の影響が明らかになった。このように、大阪茨木モスクにおいては日本語を必要とする課題が多いために、日本語運用能力を重要視している。そして日本語を重要視した結果、第3章で論じたとおり、地域社会のイベントに積極的に参加することに繋がったと考えられる。そして、そうした交流によって、地域の人々のイスラムに対するイメージがポジティブなものに変化した。

第7章では、以上の実践の現場から出てきた結果をまとめ、「在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因」を8つ導出した。その内訳は、日本社会に求められる要因が2つ（①正義を持って関わる②モスクを地域の力として捉えること）、在日ムスリムに求められる要因が4つ（③在日ムスリム間の共生④地域への貢献⑤日本人ムスリムを大切に⑥日本語を大切に）、両方が共に求められる要因が2つ（⑦意図的に直接的な交流を促進すること⑧ダイナミックな関係）存在する。それらの要因が成立すればするほど、在日ムスリムと日本社会の間に共生社会が成立すると考えられる。ここでいう共生社会とは、「在日ムスリムの持つ文化が、主流社会と異なる性質を持つことを日本人が認め、在日ムスリムを同じ人間として扱い、社会の一部として取り入れる方向性である」ことを意味している。つまり、在日ムスリムが宗教を守るか、それとも社会に排除されるかといった二者択一に迫られないようにする方向性である。その時には、日本社会における正義を在日ムスリムは感じ取るであろう。その結果として、本稿の第4章で論じたように、イスラムの教義に基づく、近隣地域への所属感が働き、在日ムスリムが、その地域のために努力することに繋がるであろう。その時にこそ、在日ムスリムと日本社会の共生によって促進される地域活性化へのムスリムの努力は、宗教の教義の実現と重なるのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Elhadedy Abdelrahim Ibrahim)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 稲場 圭信
	副 査 教 授 千葉 泉
	副 査 教 授 澤村 信英
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究は、近年日本においても増加しているムスリムと日本社会の関りを、ムスリムとしての当事者の視点も入れながら、大阪茨木マَسジドにおける参与観察およびインタビューなど質的調査のデータを中心に考察し、異質な文化の共生の可能性を探究したものである。</p> <p>序論では、グローバル化の進行と個人化が強まる現代社会において言語・宗教・民族などが異なる人々が共生する状況を説明している。ヨーロッパにおける多文化共生政策やとりわけフランスの失敗事例から新しい共生のあり方の必要性に言及した上で、先行研究を整理し、在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因とは何かという、本論文のリサーチ・クエスチョンを提示している。</p> <p>第1章では近年の日本におけるマَسジドの増加の理由としてマَسジドが果たしている在日ムスリムと日本社会の橋渡しという機能を見出し、第2章ではマَسジド内部におけるムスリム同士の関係に注目し、そこでムスリム同士の共生が成り立っていることを明らかにした。次に、在日ムスリムと日本社会の関係を検討した第3章では、大阪茨木マَسジドに通う在日ムスリムと地域社会の日本人の交流の詳述し、お互いの理解促進のために交流を継続する重要性を論じている。第4章では、災害時における大阪茨木マَسジドに通う在日ムスリムが西日本豪雨による被災地・被災者への支援として募金活動を行った事例を取り上げ、教義との関連性を論じている。唯一神であるアッラーの存在によって「支援する側と支援される側の対等な関係」が形成されることも明らかにしている。このような対等な関係に、在日ムスリムと日本社会の共生の可能性を見出している。</p> <p>さらには、イスラム・在日ムスリムと日本社会を結びつける日本人ムスリムの役割と日本語について、第5章および第6章において実践の事例を分析している。日本人ムスリムは日本語と日本社会への深い理解を通して、日本社会とムスリムを結びつける「架け橋」の役割を持つと論じている。また、マَسジドの運営面やムスリム・コミュニティにおけるメンバー間の関係構築における日本語能力の影響を明らかにし、その日本語運用能力の重要視が地域社会のイベントに積極的に参加することに繋がったと論じている。そして、そのような交流によって、地域の人々のイスラムに対するイメージがポジティブなものに変化したことも指摘している。</p> <p>結論である第7章では、在日ムスリムと日本社会の共生を可能にする要因を8つ導出している。すなわち、日本社会に求められる要因2つ（①正義を持って関わること、②マَسジドを地域の力として捉えること）、在日ムスリムに求められる要因4つ（③在日ムスリム間の共生、④地域への貢献、⑤日本人ムスリムを大切に、⑥日本語を大切に）、両方が共に求められる要因2つ（⑦意図的に直接的な交流を促進すること、⑧ダイナミックな関係）であるとし、それらの要因が整えば整うほど、在日ムスリムと日本社会の間に共生社会が成立すると結論づけている。</p> <p>日本におけるムスリムはマイノリティであるが、近年ムスリム人口は20万人ほどに増加している。本論文は、異なる文化や宗教との共生という日本社会が取り組むべき課題について、在日ムスリムの具体的な事例をもとに、社会学的観点から考察を行い、共生への可能性を探究した優れた論文となっている。</p> <p>以上のことから、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。</p>	